

1. 2 地質概要

図1. 2-1に最終処分場周辺の地質図を示した。最終処分場北東部および南部には、白亜紀後期とされる花崗岩類が分布し、処分場近傍には、古生代～中生代のチャート、頁岩および砂岩が分布している。これらの地層の縁辺部にとりつくように、新生代新第三紀鮮新世～第四紀更新世の砂層・粘土層（古琵琶湖層群）が分布している。

古琵琶湖層群の代表的層序は最下位に相当する上野累層に始まり、最上位の高島累層に至る8累層に区分されている*1。このうち、最終処分場周辺には草津累層が分布する。層序を図1. 2-2に示した。

本層群の層厚は総計1500mにおよび、扇状地、蛇行河川、湖沼などの堆積環境を交互に繰り返して堆積したと考えられている。本層群には多数の火山灰層が挟まれており、層序を知るうえで有効な鍵層になっている。文献*1によると、調査地内に分布する古琵琶湖層群は草津累層に相当するとされている。主として砂と粘土の互層である。

* 1 吉田史郎・西岡芳晴・木村克己・長森英明(2003)
近江八幡地域の地質、5万分の1地質図幅

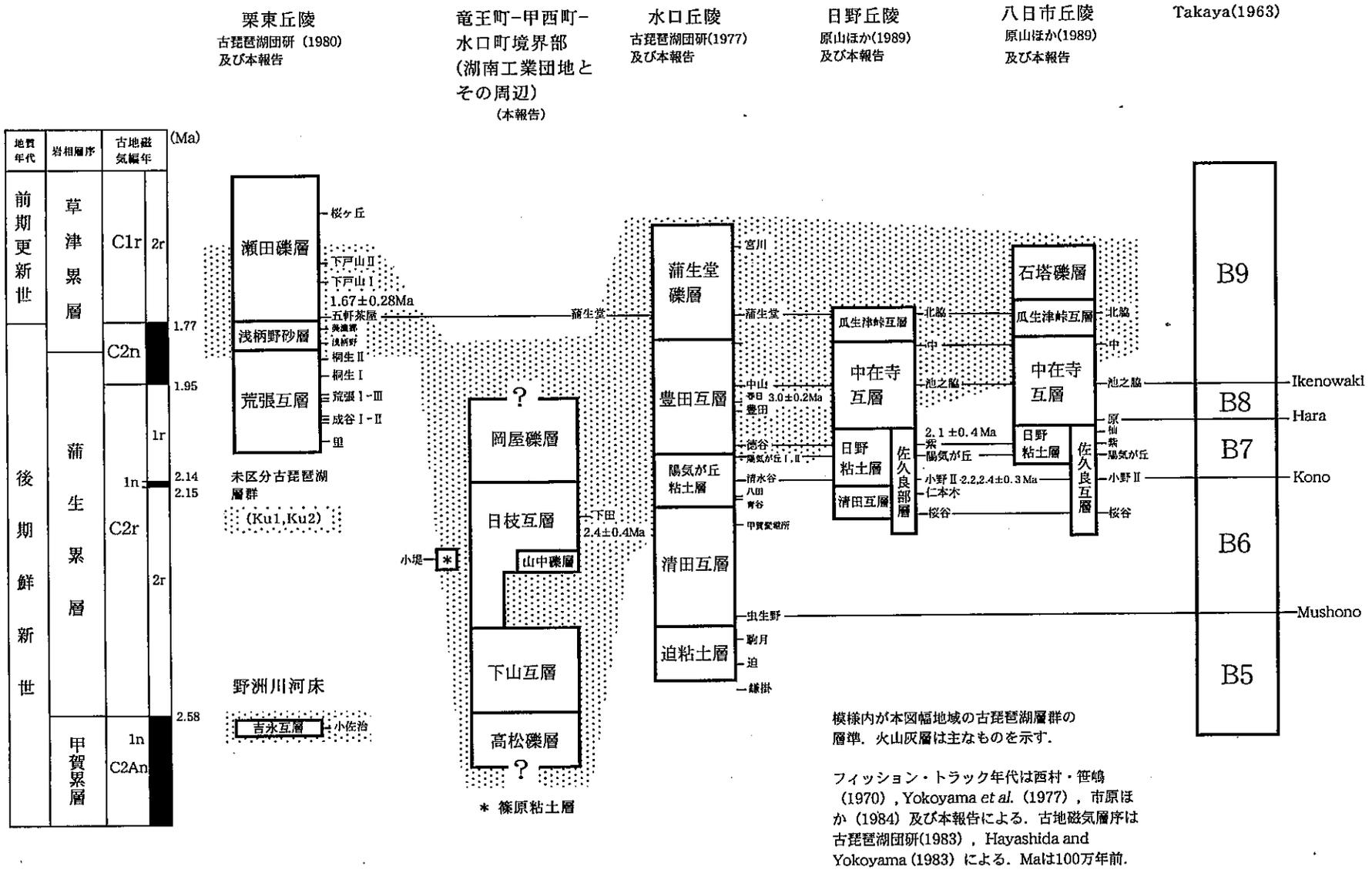


図 1.2-2 「近江八幡」図幅地域の古琵琶湖層群の年代と対比
『近江八幡地域の地質』より抜粋